

1 2月28日（日）主日礼拝レジュメ

「知恵の限界」 伝道者の書1章16～18節

16節の意図は、伝道者は本当に知恵から、また知恵によってそこに本質的な意味を見出したのか、それでもし見出したと言えなければ、一体誰が知恵から本質的な意味を見出すことができるのかということ。伝道者というかたちで自らを表すソロモンは知恵に満ちた王であり、知恵と富を自らのものとしていた。もし、そのソロモン王が知恵を通して世にあってまことの幸い、究極の幸い、これ以上ない幸いを得ることができなければ、誰が得ることができるのかと言おうとしている。

17節で「私は、知恵と知識を、狂気と愚かさを知ろうと心に決めた」とあります。少し驚かされることは、なおも知恵と知識を知ろうと心に決めたこと。狂気と愚かさについては、2章2節で「笑いか。私は言う。それは狂気だ」とあり、3節には「人の子がそのいのちの日数の間に天の下ですることについて、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていよう。」とあるので、恐らく2節以降のことを指し、実際に狂気と愚かさとは彼が経験した快樂を指しているのではないかと思われる。ソロモンは、快樂の中にも知恵や知識を得られない何らかの意味を見出そうとした。伝道者はありとあらゆることを試しながら、何とかして人生の意味、生きる意味、日の下で労苦することの意味、13節にありますように「天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り出そうと心に決めた」とあるように、天の下で行われる一切のことについての意味を、納得できるような意味や目的を見出そうとしたということなのだろう。しかし、あらゆることをいろいろ試してみても「風を追うようなものであることを知った」と結論づけた。

18節において格言のようにして結論的にソロモンは語る。「知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識が増す者には苛立ちも増す」とは何という皮肉

だろうか。知恵が多くなれば、これまで分からなかったことが一つ一つ分かってきて、すべてがクリアになっていき、そこに生きるための喜びなども出て来るはずなのに、そうはならない。むしろ知識が増せば、分からないことや空しさ、満足できないことや心から喜べないことなどが出てきて、さらに人を苛立たせるということ。

伝道者は、人生を生き抜く中で、その場面場面において空しさを感じ、そのことについて、突き詰めても仕方がない、どうせ人は老いていき、病になり、いつかは死んでいくものだから、それをそのまま受け入れるしかないとは考えられなかった。私たちが存在しているのは偶然の産物であって、人生に意味や目的を見出そうとすること自体意味がないのか。そうなれば伝道者が書いているように知恵を増し加え、私の心は多くの知恵と知識を得たということにも意味がないということなる。また、そんな意味のないことを考えても仕方がないということなる。それであれば、この伝道者の書が語っていますように、空の空、すべては空ということになってしまい、生きること自体に意味がないということになりかねない。

天地万物のすべてのものを造られた神がおられると聖書は教える。そして、その神は、すべてのものに意味と目的をもって創造された。もちろん人にも神は生きる意味と目的を与えておられるが、この神から離れ、神を抜きに私たちが世にあって得た知識をどんなに増し加え、それでどんなに人生の意味を考え、人生に喜びや満足を見出そうとしても、空しい、空の空、すべては空ということになってしまう。なぜなら、神を離れば、なぜ存在しているのか、どのようにして自分は存在するようになったのか、そもそも存在していることが分からなければ意味も目的も分からないから。もう間もなく主の年2026年が始まるが、新しい年は、神を求めらる中で、自分の存在を神を通して確認し、人生の意味と目的を神を通して見出す一年とさせていただきたい。